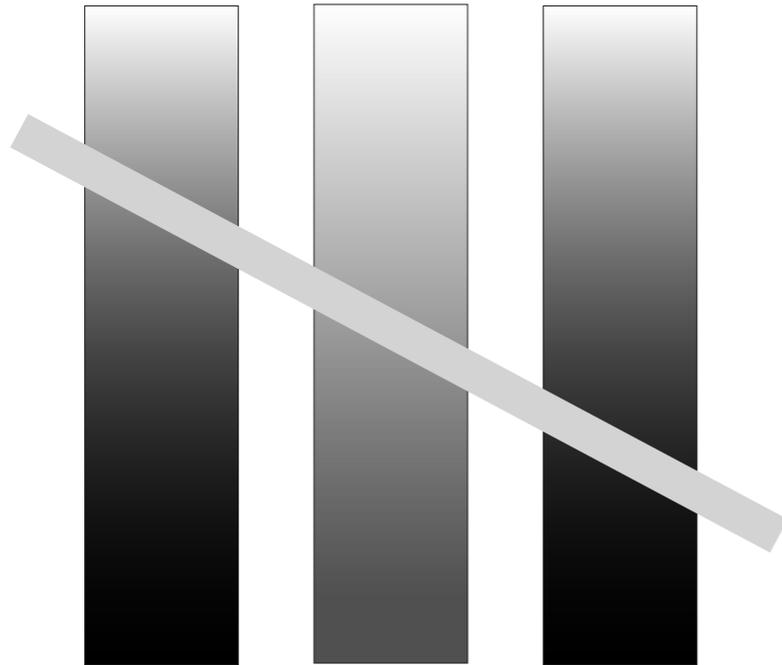

月 刊

MAROAD

Vol.170



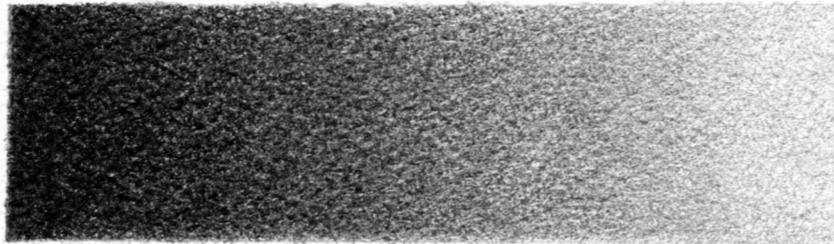
2022.02.27

詩と評論

月刊「MAROAD」

Vol.170.2022.2.27

「月刊まるぼう」編集部



2

珈琲タイムレッスン (大人の絵画教室)

レッスナーの反省

- ・リズム良く集中できませんでしたか？
- ・鉛筆で塗るのではなく、軽いストロークで線を並べて描く。
- ・四角形の形からできるだけのみ出さないよう、できるだけ消しゴムを
使わずに仕上げましょう。
- ・目標は平板なムラのない三つの明るさをつくる技術です。
- ・クセを取り除き鉛筆をコントロールする。
- ・クセを個性と読み替えないでください。

○ レッスン 1-2 グラデーション

- 1 明暗によるグラデーション (gradation)
- 2 なめらかな明暗の変化をつくる (課題の目標)
- 3 グラデーションとは濃淡の徐々に変化する階調のことです。

3 注意点 (ヒント)

- ・指で擦ってボカす技法は使わないでください。
- ・暗い方から描きはじめ徐々に明るい方へ移動するよつに描きます。
- ・明るい方の筆跡の密度が荒くならないように。
- ・鉛筆を持つ方の手で画面を擦ってしまうことがあります。擦らないよ
うに工夫して作業してください。
- ・深呼吸をして、肩の力を抜いて気持ち落ち着いてから始めましょう。

はらだてつろう (美術家)

「月刊まろうど」170号 目次

詩・小説

- 広場 ……………中嶋康雄 4
文化遺産 ……………野口裕 5
Postcoronaに会おうNe (俳句) ……………岩脇リーベル豊美 5
『マルクスの場合』—「マルクス昇天」より (小説) ……………諸井学 6
奪われて ……………大橋愛由等 7
怪訝ソネット ……………大西隆志 8

ART NOTE

- 珈琲タイムレッスン (大人の絵画教室) ②……………はらだてつろう 3

翻訳英詩

- 新連載／「ミナ・ロイ「ジョアネスへの歌」21番……………安西佐有理 13

連載小説

- 13回目／「海猫堂店仕舞記」……………千田草介 15

第10回〈日本・韓国・在日同胞詩人共同 尹東柱詩人 追悼の集い〉作品集①

- ①日の残りの匂い……………大西隆志 ②遠国……………今野和代
③かささぎが啼くように……………にしもとめぐみ 10

連載 評論・エッセイ

- アメリカ南部に暮らして ……………モス堀淵敬子 9
益田っこ通信 84号 85号……………元正章 14
神戸詞あしび 158 「尹東柱がいた京都の下宿は私の学生生活の現場だった」……………大橋愛由等 16

編集部だより★91／戦争が始まった。ロシアのプーチン大統領がウクライナに対して侵略戦争を始めたのである(2・24)。このような帝国主義的戦争がわたしが生きている間に起きようとは思っていなかった。さっそく「ウクライナ戦争」と名付ける人もいれば、「第三次世界大戦」に発展するかもしれないと危惧するひともある。近代戦は若い兵士ばかりではなく、多くの一般市民も犠牲になる。第二次世界大戦で2000万人という飛び抜けた犠牲者を出したのがソ連である。各国の死亡者数と比較しても群を抜いている。戦争は愚かな行為であることを先の大戦で国民の間でじゅうぶん認識されているに違いないのに、プーチンというひとりの為政者の決断(野望)によって戦争が起こってしまった。侵略されたウクライナはNATOに加盟していず、強力な軍事同盟が背後になく、ロシアにとってウクライナの全土掌握は時間の問題かもしれない。ロシア軍に対するウクライナ軍がどれほど抗戦できるのだろうか。首都キエフは陥落し、親ロシア政権が誕生する可能性も高い。ではなぜプーチンはウクライナに軍事侵攻したのか。それは彼の歴史観によるところが大きいのではないか。1991年にソ連が崩壊することによって、多くの国家が独立することになる。プーチンはこのソ連崩壊を「20世紀最大の地政学的悲劇」とみなしており、すこしでも国土・領土を回復させるロシア式レコンキスタを達成するのが、自分にかせられた歴史的使命だと認識しているのに違いない。またプーチンが2014年にウクライナの親ロシア政権がウクライナ国民によって崩壊されたことを契機にクリミア半島に軍事侵略して併合した際、ロシア国民によるプーチンの支持率は80%以上になった。ロシア国民もまたロシア式レコンキスタを支持している人も多いのではないか。歴史は「被害者のルサンチマン」で動いているのだ。／今月の読書会は高橋昌明・神戸大学名誉教授が話者。テーマは、「武士はほとんど侍だが、侍は武士とは限らない」(大橋愛由等)

◆ 広場

中嶋康雄

アイドルが歌っている
喜びも悲しみも電磁の中で
クルクルとかき混ぜられる
足が痛くて走れない
うんちが日ごと臭くなる
自分のなにもかも
昔と同じと思っているが
あとにトイレに入った人が言う
くさっ
ホッチキスの大量使用
書類は綴じられ続ける
中間が幻になり逃げてゆく
ページはペラペラと無断で暗記され
いつの間にか消えてゆく
暗記するものはひとではないなにかで
どこにいるのかわからない
うんちをしないやつなど信じられない
いるのかわからないのか
あるのかわからないのか
人工がヨロヨロとなにかを触媒している
クジラはいつ絶滅するのか
秒針を見ているうちに
今度はウナギだという

広場が雑草に覆われている
遊ぶものなど誰もいない
ドローンが上空を飛び
アイドルが降りてくる
雑草だけが揺れている
アイドルは丸い尻を出してうんちをして
すぐ帰ってしまう
コンサートは大成功だ
5万人が熱狂している
オンラインで世界に同時配信される
広場は激しく加算され
仮想の虫が棲息している
虫は数字を持つている
虫の中に寄生虫がいたりもする
寄生虫が持つ数字が
その宿主の虫の持つ数字より
すごく大きいとすれば
アイドルはもう一度
丸い尻を出して
丸いうんちをするかもしれない
丸いうんちから
小さいアイドルが
ピヨコンと顔を出すかもしれない
おびただしい数字をお漏らししながら
歌い踊るかもしれない
秋が消え
もうお米がとれない

◆ 文化遺産

野口裕

地球の歴史は四十六億年と言われるが
その頃からそれと同じほどの年月が経った頃
つまり地球誕生から九十億年後くらいに
まだ動いているAIがあった

生まれたてはデータを食っちゃ寝食っちゃ寝
あまり稼働もしていなかったがやがてもりもりと働き出し
AIが一齐に予言すると
株価が急に傾いたりする現象の一翼を担ったりもした
だがすぐに飽きたようだ

あくせくと動いて予言を頻発するAIの多い中
できるだけ少ない太陽光発電のもとで
ナメケモノのようにじつとして

本当にどうでもいい予言を
ごくごくたまにもらす
そんなスタイルで
過ごしてきたらしい

生みの親である人類は
まるで気付かなかったようだ
彼らが絶滅するまで
そいつに言及した記録がない

人類絶滅後を生き抜いたが
どうでもいい予言を行う
最後の日はくるはずだが
いつ頃それを行って
誰がそれを聞くのか
そこところは
何ひとつ
分かっていない

◆ Postcoronaの会おぐネ

岩脇リーベル豊美

晩鐘や初の茜に沈む塞
晩冬の季語の予定調和かな
日霧晴れず大地踏み込む足折れて
足いたいいたいいたいとまるめろふむ
雌ライオンひと足さきのオンライン
日も夜もなくこびつこときつと手を結ぶ
輪郭なき現実読み解く鯨の背
町中とも国中とも癒しの工事現場
脳死母のウイズコロナにて弔うか
母は逝き子に行けずオンライン葬儀
冬靴を履きならす右足首に祈る
右手を左胸に当て洗脳さる猿

◆『マルクスの場合』―「マルクス昇天」より

諸井学

マルクスよ!

わたしはマルクスの面影を追って空を見上げた。すると、透きとおった青い空は一転して俄かに掻き曇り、地上を遍く黒雲が覆った。時はすでに三時を過ぎていた。遠くで雷鳴がしはじめた。

突如として隣家の窓のカーテンが二つに裂け、中から慌てた主婦が飛び出して、ベランダに干した洗濯物を急ぎ取り込んだ。

まさに雷が響かんとす。

「モロイ、モロイ、イマ、シバクダニ」

その時、確かにわたしに語りかける声を聞いた。

「主よ、主よ、何ぞわれを拾ひ給ひきや。何なれば遠くはなれてわれを捨ておき給はず、道に迷ひしわが嘆きの聲を聞き給ひきや。ああわが主、汝晝われを呼ばはれば、われ喜び軋びて駆け寄り、夜われ汝を呼ばはれば、汝勤しみてわれを厠へ導きぬ。わが平安を与へしもの、汝は強し。われ悪しき犬どもに囲まれしとき、汝悪霊どもを追ひ払ひ、われを悪鬼の口より救ひ給ひき。されば彼ら遠きよりわれを嫉みて吠えぬ。主かれを悦び給ふがゆえに助くべしと。されど汝はわれを路傍より拾ひ給へるものなり。汝われに雪印の乳を与へ、われを育みぬ。われは犬にして人にあらねば、われは汝の友たるをえず、汝の弟子になりえず、これよりわれは汝の僕となりぬ。かの羅馬の賢帝になぞらへて付けられしわが名を汝より呼ばれたるとき、わが誇りここに極まれり。わが輩の羨むところなり。われ朝な夕な汝に導かれて歩みしゆえ、倫迷ふことなく、罪犯すことなく、いまわが生命安らかに終へんとす。さればわれはこれより汝の御名をわが読者に述べ伝へ、汝を會のなかにて讃めたたへん。わが主を懼るものよ、わが主を讃めたたへよ」

わたしはこの声に驚懼した。

突然、天が轟き地が揺らぎ、わたしは倒れそうになってわれに返った。

わたしはまさに瞑想に酔い痴れていた。或いはスコップを杖代わりにして、居眠りをしていたのかもしれない。

*『マルクスの場合』は出版にむけて現在推敲中の作品です。そして「マルクス」は主人公が飼っている犬の名前で、正式にはマルクス・アウレリウス・アントニヌスといえます。

◆奪われて

大橋愛由等

わたしはなにを語ろうとしているのか
凍蝶の

多色潤沢な声 弾み転んでゆく身体

喜怒が横溢するところを 奪いとり

色のさえずりをもぎ

山河を 国境を 超えた羽根をむしり

またたかぬ星 冬雲たちが群居しつづける空

はてなく巡行する風群れも

まるごと なにもかも

荒野のなすまま

枯れの地は枯れるままとし

寒冷のかの地に還る

コトバと羽根を篡奪

おどろき よろこびという情動を

禁じたのは

あのひとたちだったのではなく

わたしたちであるのかもしれない

かなしみ にくしみ うろたえ

たたずみ たゆたい 後ずさり

わたしはなにを刻もうとしているのか

たちはだかる壁面にただ立ち止まり

刻むべき失語も涙も いくらコート

ポケットをまさぐってみても

みつからないのはわかつているはず

あなたは見えていたのだ

かの日もあの日も 冬の比叡を臨み

朝ぼらけ 昇る朝日にうながされ

詩の断片を拾い

歩きつづけた川端でみつけた

鳥たちのまたたき 今日生のいつくしみ

やがて見えてくる深遠な樹林帯に

かつて住んでいた日王のまなざしが

あなたとあなたの同胞を射つただろう

そしてたどり着いたこの地の古色な壁、壁、壁

この地に記したあなたのコトバは

奪われて 隠蔽されて

越冬をゆるされなかつた者たちよ

風に刻んだ声さえも封印された者たちよ

押しつぶされた夢を拾うことも

許されなかつた者たちよ

わたしは信じよう

風と声は巡行して

きつと聴こえてくるはず

あなたの頬をなぞった

比叡の息吹きは甦り

古色な壁もまた そこに染み込んでいる

あなたとあなたたちの記憶を覚醒する

還つておいで わたしは待とう

わたしの傍らには

耐えつづける者たち

拾うことをあきらめない者たち

いつまでも刻む者たち

そして翔ぶことを

断念しない

凍蝶もまた

このとき、この場、この境界に

いるのだ

◆怪訝ソネット

大西隆志

どこの街道だったのか、一本の樹が
里程標のように距離ではなく
時間をふるわせるための風向きとして
僕らの旅に言葉を与えてくれた

一人は天空に伸びる階梯として
ゆつくり歩みを進める巨木を連想していた
足は手になり、手は足のように意味を帯び始め
樹を名付ける言葉に、言葉が樹々の枝々の鳥に移る

二人は引き裂かれるのか、坂の途中でふりかえり
荒野の十字路に埋まっている兵器を掘りだしている
人魂での気晴しとは見えないが、カルテットなり

危なかしい街道には堆積した僧侶の文字が
歪曲した水路にそって咲き出す花の匂いを燻らせ
一本の樹への飛火を誘い出しているのか

アメリカで結婚して12年あまりが経った2001年
9月11日の朝、何気なくテレビをつけてCNNのニュー
スを見ていたら、とんでもない光景が写っていた。
ニューヨークの世界貿易センターの二つのビルの一棟
の後ろから煙が上がっていたのだ。何があっただろう
としばらく見ていると、飛行機が飛んできて、もう一棟
のビルにぶつかかった。炎と煙がまい上り、まるで映画か

アメリカ南部に暮らして⑫——モス堀渕敬子

なにかのようだった。

その日は午後2時からシャーロットのベルリッツラン
ゲージセンターで日本語を教える仕事が入っていたの
で、昼すぎには出ないといけない。高速道路を走りなが
ら車のラジオをつけた。ラジオでもこのニュースを報じ
ていたが、シャーロットはノースカロライナ最大の都市
でニューヨークに次ぐ金融街なので、次に狙われるのは
シャーロットに違いないという思い込みで、みんな仕事

場から逃げていると言うのだ。

「ええーっ、私、これからシャーロットに行くんですけ
ど………」と私までパニックになりそうだった。それで
車を路肩に停めてベルリッツに電話すると、やはり来て
ほしいと言われた。ベルリッツは中心街からは離れてい
たのでさほど影響はないようだった。確かにシャーロッ
トには銀行の本店が多いが、私の印象ではそこまで重要
視されていると思えなかった。シャーロッ
ト市民の自意識過剰といったところだろう
か。

影響があつたとすれば、その4日後の9月
15日に夫と私の自宅でおこなった夫の両親の金婚式パ
ーティーだった。お天気にも恵まれ無事に終わったが、
テキサスから来るはずだった義母の友人が、空港が閉鎖
されたために来れなくなったのは残念だった。

被害はニューヨークだけでは終わらず、同時多発テロ
と呼ばれる恐ろしい出来事だった。アメリカはここまで
嫌われていたのだ。

◇日の残りの匂い（尹東柱へ）

大西隆志

先の尖ったペンを掌の甲に押しつける
インクの色が井戸のなかで見た空と同じだ
空に流れたのも、その色なのか
見えない星をつつむガスも
かすかな痛みにも
懺悔録のノートの下部
渡航とメモを入れる
ハングルではない漢字を
激しい揺れに身を投げ出し
膨張帝国へと
蜃気楼を頂くのは跛行の翳りだとして
一九四五年に福岡刑務所で別世
その五年前に神戸、姫路の若い詩人たちが
特高警察に拘束されている
獄死の若い詩人は三月三日の事件のことは

頭の隅にあったのか、わからないが
なぜ海を渡ったのか
大切なハングルを禁じられるなか
詩を求めることで、コトバの生まれくる現場での抒情よ
気になっていたのだ、圧政の嵐のなかへと
ペンを折らなくて、変節の強要される荒野に
高揚感に満ちた雅語を操る詩人たちの
敬愛していた詩人の世過ぎ
書かされた詩なのか
書かなければならない詩
白骨による踊りを真似てみようか
十字架の人の面影を支えとし
身近な、日々の、名付けるコトバ
手を差し出して掴むのは
悲しい結末だとしても
かすかに匂うのは梅の香ではないのだ
詩の蕾が埋められる
たおやかに滲むペン尖へ
書き損じたコトバへ

◇遠国―尹東柱に、宗夢奎に、

今野和代

おんごく なはは
なははや なははやは
よーい よおーい おんごく 尹東柱
遠国 ゆんどん 尹東柱 遠国 そんな 宗夢奎
あなたの ほつれた 下着の左 左の胸の 擦れた 糸の
おんごく おんごく 左の袖の 薄くけば立つ ほつれの光
注射打たれた 血潮の赤は おんごく ごく ごく 削られ 壊れ
なははは なはや よーよーよよよ おんごくなはは ゆん ゆん どんちゅ
遠くで けぶる なははの刻の 空は 風は 星は そんなんぎゅ
なははや どんちゅ そんなんぎゅ 悲しむ者は 悲しみは
やさしい乳房 甘い息 くちびる 頬にも 触れぬまま
悲しむ者の 悲しみは 痛みの夜明けの 悲しみは
夢奎の眼鏡 半欠けで 東柱の胸は 熱いまま
無量の光 降りそそげ 東柱に 夢奎に
降りそそげ 夢の渦巻 逆巻いて
竜巻となれ 龍となれ
二月の無窮この空の
青の果てまで
駆けのぼれ

(2022.2.17)

安西佐有理

ミナ・ロイ「ジョアネスへの歌」21番

—Songs to Joannes, XXI (1917年)

I store up nights against you
Heavy with shut-flower's nightmares

Stack noons
Curled to the solitaire
Core of the
Sun

あなたにそむいて夜を貯めこむ
ずっしりこもる閉じた花の悪夢

真昼を積みば
まるまって独りの
指輪の中心に
日輪

◆Mina Loy (1882~1966)

英国出身、パリ・イタリアを経て米国に渡った詩人・作家、美術家、起業家。「匿名」でいるために「詩人」という匿名を使っていると語ったモダニスト、フューチャリスト、ダダイスト、シュルレアリスト、フェミニスト。

詩集『ジョアネスへの歌』（名前を英語式に『ジョアンズへのラヴソング』とする先行訳も）は、イタリアのフューチャリスト、ジョバンニ・パピーニとの関係破綻から生まれた。後日（1923年）、『ラブソング』（Love Songs）の3番として改稿された際は、「あなた」「わたし」不在のうちにシンプルに昼夜を対比した世界に整理されている。

◇かささぎが啼くように
にしもとめぐみ

あなたの愛らしい詩が
見た季節から
八十五年ばかりもが
過ぎてゆきました
その緑の海も
少し憎らしいお月様も
雨や風や 花々にも
小さな 生き物たちにも
あなたの見上げた
空や星が同じように
今も あるのでしょうか
あなたが天国で聞かせている
その歌が こどもたちに
地上にも 満ちますように

*かささぎが朝啼けば、吉報あり、という。
尹東柱「こだま」一九三八・五より



2022年2月21日（月）

第10回〈日本・韓国・在日同胞詩人共同 尹東柱詩人 追悼の集い〉京都・同志社大学 今出川キャンパス内「尹東柱詩碑」前でスイトピーを献花する参加者たち

◆益田つこ通信 84号

はじめ
元 正章

▼「ただ今、コロナ中 カルペ・デイエム」

〈コロナ特集その4〉〈2022.02上期〉

ものごとにはなべて、前と今と後があります。というか、前と後に囲まれての今です。今を生きたりということは、過去を含めて未来をも想定してこそ有意義なものとなります。〇年余りの長きに亘って続いているこのコロナ禍も、時の物差しによれば、「ただ今、コロナ中」ということでしょうか。

ラテン語に「カルペ・デイエム」という格言があります。「その日を摘め」という原語から、「今という時を大切にしないさい」「今を生きたり」という意味にもなります。それを人間的な動機から、「食べたり飲んだりしようではないか。どうせ明日は死ぬ身ではないか(聖句)と思えばいいしはなりません。『今を生きたり』ということとは、「メント・モリ」(死を想え)と対句になって考へるべきでしょう。人は必ず死にます。それがいつの日かは神のみぞ知るです。だからこそ、この今が大切なのであり、生きていくこと自体が素晴らしく尊いのです。

このコロナ禍にあっても、同じことが言えるでしょう。その間、今まで当たり前享受していたことが、そうならなくなったことで、究極的には「今は、死と隣り合わせ」であることを意識させられました。

ここで改めて考え直してみよう。「われわれ人間は、ウイルスと戦わなければならないのか？」決してそうではないでしょう。人間が進化すれば、同じようにウイルスも進化しているのです。今だけの尺度で見るとはならず、長いスパンで眺めれば、共生しあっていることが証明されています。人間の傲慢さをこそ顧みる「今この時」です。

◆益田つこ通信 85号

はじめ
元 正章

▼「ルーティン」〈2022.02下期〉

「気持ちのみ若きが危ふ、両手いっぱい荷物を持ちて水溜まり跳ぶ」(小島ゆかり)。戦後生まれにしても、この3月の誕生日から、なんと後期高齢者の仲間入りをする事となります。古稀を迎えて、益田市民となり早や5年。気持ちだけは若く、ロマンティックな性格はいよいよ磨きが増し、冒険心も一向に衰えを知りません。それに比して、身体能力はおろか記憶力も減退しているのは自覚して余りあり、無理は利かないことを日々思い知らされます。誰が忠告してくれたのか「年相応に」が、いちばん無難な生き方なのでしょう。

ルーティンという言葉に考えを巡らしてみます。日課、日常の仕事、習慣(慣習)。決まりきった、相変わらずの、単調な、という意味。人はそれぞれにルーティンがあるわけであって、朝起きて夜眠るまで、ほぼ同じようなことを繰り返して生きています。牧師の場合、毎日曜日の礼拝はまさしくルーティンであって、それを軸にして1週間が回っています。たとえコロナ禍であろうとも、災害に遭おうとも、身内に不幸があろうとも、何はともあれ礼拝は守るべきものであるのです。

しかし、この基本軸がぶれたり、崩れてしまったのなら、どうなるのか?このコロナ禍のために、己のルーティンを維持できなくなった人や、余儀なく生活そのものが破綻してしまった人や、中には身近に亡くなられた人もいます。それであっても、この世のルートはいずれ天の国にと至るまでのプロセスなのです。「桜梅桃李」あなたはどこまでもあなたであって、そのままを大切に生きてほしい。

海猫堂店仕舞記¹³

千田草介

元町高架下を西にむかつて歩いていくと、ぐるりと一巡して「海猫堂」の店先にもどるかたちになる。

「もどるわけやないで、正確には」とチャンドラは言った。「行く川の流れば絶えずしてしかもこの水にあらず」とミロクさんが言った。「同じ川の水に入ることではできんと、ギリシアの哲人も言うてる」

「そういえば……」私は五年前のことを思い返した。チャンドラの背中に舵輪をつけてやったのだ。そうすること、南北にしか歩けない(子午線)病から自由にしてやれたのだが、その舵輪が猫の背に見当たらないことに今さらながら気づいた。

「自動変針器付き内臓ジャイロスコープに替えてもろたよ」とチャンドラは言った。「あんな恰好悪い舵輪、恥ずかしいつけとられへん。根性の悪い冷やかし客の手で勝手に回されることにもなりかねんしな。あれから五年もたったんやし、技術革新や。万物は流転する。技術も進歩して同じところにとどまらん。ヴァージョン・アップで機能を増やして、さっきの飛行機の編隊も早ようにキヤッチできたで。はは、さながら早期警戒猫や」

「あ、そうか」ミロクさんが私に言った。「猫主人にけつたいなものを食わせたというのは、あんたか」

私はチャンドラに子午線を食わせてしまったことを白状した。と同時にそれを拾った場所がミロクさんと縁の深いことに思い当たった。今は明石天文科学館のすぐ北に位置する。「月照寺……」

「そらあんた」ミロクさんが言った。「わしが(星を売る店)を開店したとこや。今は神戸に移転したがな。なるほどな。子午線、何本拾うた?」

「たしか七十五本……」
「ようまあ断りも臆面もなしに」ミロクさんは呆れ顔で、「でもまあ、それでわしと猫主人の縁が繋がったようなものやよつて、よしとしようかいな」

「あ、ミロクさん」チャンドラが言った。「パミールみたいな高地に仕入れに行かんでも、星はいっぱいあるやないですか、ミロクさんが店開きした昔はなかったけど、今は月照寺の目の前に」

「天文科学館……」私は言った。「のプラネタリウムか」
「そうか」ミロクさんが言った。「あれはわしの目の黒いうちからあったが、気づかんかったな」

「あかん」私は思わず叫んだ。「あそこには護法神みたいな《戦隊》がおります。人呼んで(シゴセンジャー)」

(つづく)

神戸詞あしび

158-2022.02.27 大橋愛由等



2022年2月21日
同志社大学尹東柱詩碑前で行われた
第10回「日本・韓国・在日同胞詩人
共同 尹東柱詩人追悼の集い」

追悼会である。里博氏は去年もおおきな手術をして、現在も外出には慎重にならなくてはいけない病状であり、今回も、作品だけの参加となった。寂しい限りだ

ひとりの友人がいる。F・Mくん。大学の同窓であり、同じクラブ（軽音楽部）に属していた。この友人をふくめて仲のいい同窓の友人が数人いる。ジャズでつながっている音楽器の特性が反映してそれぞれ個性が異なっている。卒業後も日本各地で働いていたにもかかわらず、ときに触れてよく集まり、友誼を深めていた。いまでも何十年ぶりに再会しても、すぐにうちとけて語り合える関係である。

F・Mくんとわたしが母校のキャンパスで再会したのは、40年ぶりとなる。2月21日（月）のひるすぎ。われわれが在学時にはなかった教会堂横の（尹東柱詩碑前）で待ち合わせをしていた。

今回で10回目を迎える（日本・韓国・在日同胞詩人共同 尹東柱詩人追悼の集い）がその日行われていた。教会堂の正面には、紅梅と白梅が咲いている。雪が時々にちらつく天候だった。陽が陰りはじめると、戸外でのイベントであるがゆえに寒さがこたえる。

この集いは、わたしと、詩人・金里博氏が、共同主宰者としてはじめた追悼会である。里博氏は去年もおおきな手術をして、現在も外出には慎重にならなくてはいけない病状であり、今回も、作品だけの参加となった。寂しい限りだ

尹東柱がいた京都の下宿は私の学生生活の現場だった

が、いま無理をして参加すれば、コロナウイルスに感染する恐れがある。それでなくても体力が落ちていたときである。わたしの方から自宅にとどまることを要請した。

この追悼の集いは、毎回、詩人たちが、自作詩をもちよつて朗読することになっている。わたしも今回のために書き下ろしの作品を用意して参加したのだが、尹東柱の詩集に書かれた解説を読んで、ひとつの発見をして驚いていた。それは、わたしが学生時代に下宿していた場所と尹東柱が下宿していた場所が実に近かったことである。（尹東柱の下宿は、京都市左京区田中高原町。わたしの下宿は同区田中樋ノ口町）ほんのすぐ近くである。

京都大学農学部北に位置する田中町は、戦前もまた多くの学生下宿があったのだろう。そこから同志社大学への通学は、いくつか道が選択できたであろうが、尹東柱は市電に乗らなかつたものと推察する。下宿から西にむかつて歩き出町柳方面に向かう。背後には比叡山が控えている。わたしが自転車通勤しているときは、川端通の川沿いの道路上にて在日のオモこたちが、毎朝ホルモンをさばっていた。

そして、鴨川を渡る。高野川と加茂川が合流する三角州でひとやすみすることもあつたらう。橋を超えるとひたすら今出川通りを歩く。寺町通りをすぎると、左手にはうっそうと茂った樹木が密集する京都御所が左手に見えてくる。街の中心が、重厚な樹林群に囲まれているのだ。天皇一族は明治維新からこの街を離れているので、その場所は、巨大な骸骨といつていいのかもしれない。しかしその空洞の主を絶対君主とする戦前の体制によって、われらが大学の先輩である詩人・尹東柱は宿命を余儀なくされたのである。

一誌名変更のお知らせ

ながらく誌名を「月刊 Mélange」としてきましたが、今号（170号）から「月刊 MAROAD」に変更します。これは、「月刊めらんじゅ」発行当時（2005年）から17年が経過して、参加構成メンバーが入れ替わり、現在の誌友・詩友たちとの連帯を確認し、今後の表現活動の切磋琢磨を願うために変更するものです。（大橋愛由等）

2022年02月27日 通巻170号
発行所／月刊「まろうど」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通1-7-1 2F
編集・発行人／大橋愛由等
maroad66454@gmail.com
定価 660円(税込)